

# 「いのちみつめて、うたをこぼせ」

## ～信頼でつながる子育て～

猿まわしは、親から子へ、子から孫へと伝えられてきた芸であり、千年の歴史をもっています。猿は、「山の神」「幸せのお使い」とも言われ、厄払いや祈願のために猿まわしをしたと言われていました。そのため、「清め衆」とも言われてきました。

主宰の村崎修二さんは、「反省猿」で有名な村崎太郎さんの父親の弟です。猿に芸を仕込むのに、「本仕込み」と言って、叩いて調教するのではなく、猿との信頼関係を結びながら芸を覚えさせていきます。

猿との絶妙な間合いの中で繰り広げられる軽妙な芸は、観衆を笑いの渦に巻き込んでいきます。人間と猿との楽しい芸を見ているうちに、私たちが忘れていた人間のおおらかさや人と人とのつながりの大切さに気づかされます。これは、子どもを育てていく時の、子どもとしっかり向き合う関係づくりの大切さにもつながり、子どもの安全・安心へとつながっていきます。

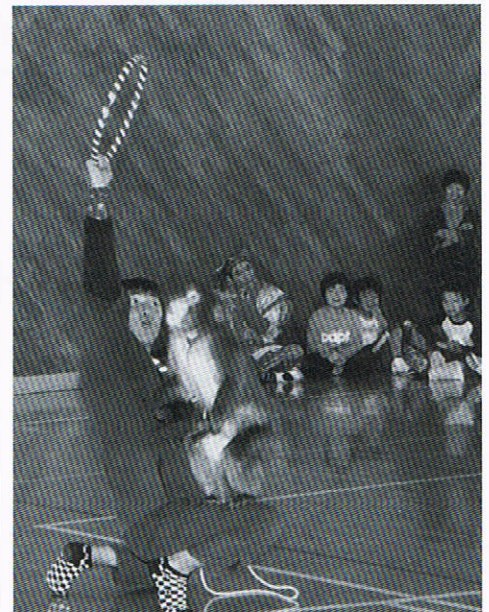
### 村崎 修二（むらさき しゅうじ）

猿まわし芸人。猿舞座主宰。1947年山口県光市生まれ。1969年東京・舞台芸術学院卒業。民俗学者・宮本常一らにより提唱された、ほぼ絶滅しかけていた芸能・猿まわしの復活・伝承運動の中心的な芸人の一人として約30年前より活動。1977年より宮本常一氏に師事。

1978年から10年間は、京都大学霊長類研究所の共同研究員として今西錦司博士と「アイデンティティについて」共同研究。

1982年より、伝統的な「本仕込み」による猿の演芸を標榜し、山口県周東町を本拠地に「猿舞座」を主宰、現在に至る。

ニホンザルの夏水（なつみ）を道連れに、全国を舞台に活躍中。



# 「無関心の壁を乗り越えよう！」

本会では女性、子ども、高齢者、障がい者、同和、外国人、感染症患者、犯罪被害者その他多くの人権問題の解消に取り組んでいます。私たちがよりよい社会をめざし、また個人が自己の生き方や価値観の多様性を求めていけば、様々な人権課題に遭遇していきます。

私は「無関心の壁」と表現していますが、人権問題が生まれる原因の一つに「自分には関係のないこと」「他人事」という、無頓着・無関心でいることが挙げられます。無関心は、被害者の救済も加害者の追及もせず、差別を放置したままにしてしまいます。

人権問題の原因は被害者にあるのではなく、加害者にあります。ですから、傍観者の存在が差別を温存することになるのです。「見て見ぬふりをする人」がいる限り、その問題は解決に向きません。

人権に関心を持ち、お互い学びあうことは、さまざまな人権問題の解決につながるとともに、だれもが尊重される社会にもつながっていきます。そのためにも、私たちは人権教育、啓発に全力で取り組んでいかななくてはならないと考えています。